

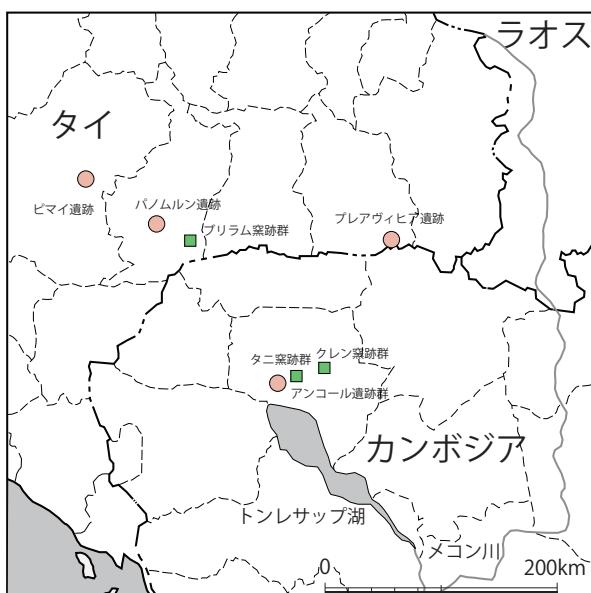
第1章 遺物寄贈の経緯と内容

2018年度当初に、東南アジア陶磁器研究家岸良鉄英氏よりご連絡を受け、氏の手元にある東南アジア、特にタイとカンボジアの陶磁器片に関して、ご寄贈の意思があることが示された。ご厚意によりこの年度内に2回にわたり陶磁器片を実際に拝見する機会を得ることができた。これらの陶磁器片が当該地域の陶磁器の歴史的変遷を知るうえでまたとない資料であることが分かり、氏のご意向に沿って奈良文化財研究所で寄贈を受けることにし、当該年度中に搬送と寄贈手続きを済ませた。寄贈後、ビニール袋に入った状態の資料を、当初の状態に基づき整理し、最終的に444袋、1414片を確認した。氏の分類名称によって内訳を表記すると、モン289袋、ブリラム周辺87袋、北タイ36袋、カンボジア・タニ窯跡10袋、バンバンプーン窯跡と北部ベトナム各1袋となった。この中で一番分量が多くまとまった資料であるモン陶器と称される一群の資料を2019年度の整理対象とした(1)。2020年度の整理はブリラム周辺と北タイ、カンボジア・タニ窯跡とその周辺出土資料を対象とした。

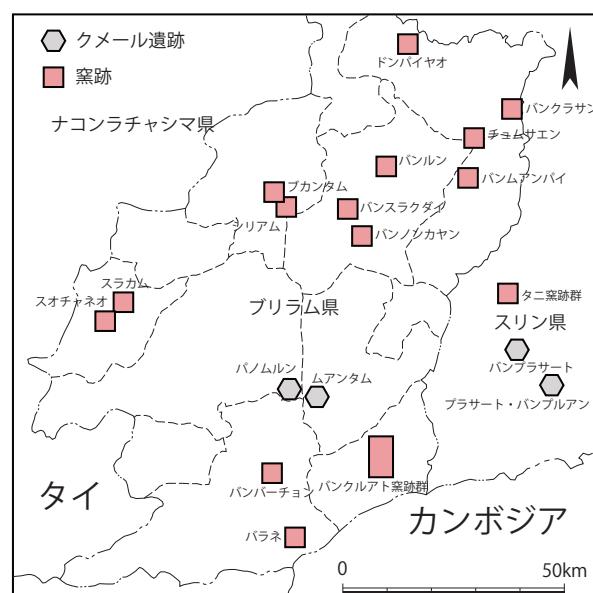
岸良鉄英氏は東京で古美術「砂碗華録」を営む傍ら、東南アジア陶磁器に関する研究を深め、『甦える安南染付一ホイアンの奇跡』里文出版 2007年などの著作がある。また東南アジア古窯址調査会の一員として、タイやカンボジアの窯跡を調査し、『陶説』紙上に報告するとともに、私家版の報告書も上梓している(2)。わけても1993年から1994年にかけてタイ領内においてクメール陶器生産窯跡の集中する、タイ東北部ブリラム県での窯跡調査に精力的に取り組まれた。その後1995年にカンボジアシエムリアップ州ルンタエク村で窯跡が発見されると、いち早く現地を踏査され、『陶説』紙上にその報告をまとめておられ(3)、今回の報告にはこの折の表採品が多く含まれている。また氏が活動の拠点とされたタイ東北部ブリラム県での表採資料も含まれている。氏は、北タイのパンーン窯跡群の踏査を1995年に踏査されており、『陶説』紙上に報告(4)されるとともに、私家版の報告書が存在する(5)。

なお岸良鉄英氏は2019年10月にご逝去された。ここに氏のご冥福を心よりお祈りするとともに、このささやかな報告書が、氏にとって彼岸でのいささかの手すさびにでもなれば、ご逝去前の警咳にふれた我々としては望外の喜びである。

- (1) 奈良文化財研究所『岸良鉄英氏寄贈 東南アジア陶磁器整理報告1 シーサッチャナライ窯跡群 バン・コノイ窯跡出土陶器編』2020
- (2) 東南アジア古窯址調査会 SGAK『ブリラム地域のクメール陶器』 1993-1994
- (3) 岸良鉄英『シェムリアップ地域のクメール陶器』『陶説』No.514 1996
- (4) 岸良鉄英『ラーンナー古窯址探訪記(1) パーン・パヤオ・ナーン』『陶説』No.505 1995
岸良鉄英『ラーンナー古窯址探訪記(2) パーン・パヤオ・ナーン』『陶説』No.506 1995
岸良鉄英『ラーンナー古窯址探訪記(3) パーン・パヤオ・ナーン』『陶説』No.507 1995
- (5) 東南アジア古窯址調査会 SGAK『ラーン・ナー王国の陶磁(1)』 1995
東南アジア古窯址調査会 SGAK『ラーン・ナー王国の陶磁(2)』 1997



第1図 関連遺跡地図



第2図 ブリラム地域関連遺跡地図